

2022年11月4日

阪神ドイツ文学会会員 各位

阪神ドイツ文学会会長
三谷研爾

第239回研究発表会のご案内

阪神ドイツ文学会第239回研究発表会を以下のとおり開催いたします。多くの方々のご参加を心からお待ちいたします。

日時:2022年12月4日(日)13時30分から

場所:大阪教育大学天王寺大阪教育大学天王寺キャンパス西館 講義室A

所在地:大阪市天王寺区南河堀町4-88 <https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~syotou/access/index.html>

[プログラム]

シンポジウム「別世界を開くものとしての芸術作品」

1988年以来、阪神ドイツ文学会の会員を中心にハイデガーを読んできた。30年以上経過した現在も、ごんまりとしたメンバーで、*Der Ursprung des Kunstwerkes*を読み続けている。芸術作品とは何か。芸術作品においては、揺れ動く「世界」が「別世界 anderswo」として立ち現れつつ隠れる。そのような「世界」は「開けの輝くこと」であり、同時に「最も暗いもの」である。そのような「世界」に立ち現れる「多義性」は「Feind-seligkeit」であり、固定化した「敵対性」ではなく「諸力の敵対性の根源的統一性」「敵対的-至福性」という運動体である。

そのような難解なハイデガーの芸術論を単に理論的・論理的に考えるだけでなく、例えば*Der Ursprung des Kunstwerkes*で言及されているギリシア神殿、ゴッホの靴の絵、C・F・マイアーの詩のような具体的な作品に即して、ドイツ文学、ドイツ思想史、ハイデガー哲学、分析哲学等々の様々な視点から芸術作品について考えてみたい。

司会:我田広之(わがた・ひろゆき/大阪大学教授)

第1発表

題目:ギリシア神殿からみる『芸術作品の根源』

氏名:中橋誠(なかはし・まこと/電気通信大学教授)

発表概要:

『芸術作品の根源』では様々な芸術作品が扱われている。そのなか、本発表は、ギリシア神殿に着目し、そこから読みとられるかぎりでの『芸術作品の根源』の読解を試みたい。

ギリシア神殿でハイデガーが考えていたのは、本来はゼウス神殿である。至高の神であるゼウス(雷光)が世界を照らしだし、万物を統べる。だが、雷光が世界を照らしだすまでは、万物は闇にとどまっている。「芸術作品の根源」で展開される、あけひらけ(Lichtung)と隠蔽(Verbergung)に関する論述、世界と大地に関する論述は、ゼウス神殿という作品(働き)に即したとき、見とおしのよいものとなる。

ゼウス(雷光)は一瞬で万物を統べ、世界を照らしだす。世界が一瞬で照らしだされ、立ちあがるのは、それに先だつ闇(無根拠)に関わっているからである。この世界の立ちあがり、一瞬でなされるものであり、なんらかの脈絡を必要とするものではない。他に根拠を持つものでもない。『芸術作品の根源』は、芸術作品の由来を問うのではなく、芸術作品がいかにして根源であるかを示す論考であるが、それは、ゼウス神殿に見られる、ゼウスによる世界の立ちあがりにその典型を見いだすのである。

第2発表

題目:C・F・マイヤーの詩「ローマの噴水」とハイデガーの「真理」像

発表者:野上俊彦(のがみ・としひこ/神戸大学博士研究員)

発表概要:

ハイデガーの芸術作品論ですぐに解せないのは、彼がC・F・マイヤーの詩「ローマの噴水」(1882年)を評価していることである。"芸術作品は、理念の表現でも現実の模写でもなく、芸術家個人の内面性の表現でもなく、日常において気づかれていない真理が形をとったものである"というのがハイデガーの芸術作品理解であるが、「ローマの噴水」は、実在する噴水の細密な描写として評価されてきた詩であって、ハイデガーの芸術作品観にそぐわないように見える。

なぜハイデガーはマイヤーの詩を、自らの芸術作品観を例示するものと考えたのだろうか。そこでの噴水の描写は「真理」のどのような姿と一致しているのだろうか。噴水の詩という形をとった「真理」とは、いったい何なのだろうか。

本報告では、芸術作品論をはじめとするテキストを手がかりにして、ハイデガーが噴水の詩に託した「真理」の像を再構成することを試みる。この作業を通じて、彼の芸術作品論を読み解くためのひとつの基礎資料を用意できれば、と考えている。

第3発表

題目:作品が存在することの異様さーヴィトゲンシュタインのアスペクト論を手がかりに

発表者:丸山栄治(まるやま・えいじ/神戸大学研究員)

報告概要:

『芸術作品の根源』において、ハイデガーは「作品が存在することは異様である」と述べており、この異様さをしばしば道具が存在することの平凡さと対比している。例えば、道具として日常的に使用されている靴はそれとして目立つことはない。しかし、ヴァン・ゴッホが描いた靴の絵は、日常的なものを主題としながらも、それ自体は非日常的なものとして現れる。このようにある作品が存在することが異様であるとき、その異様さはどのようにして生じるのだろうか。この問いについて、本発表ではヴィトゲンシュタインの哲学を手がかりにする。というのも、彼は、「何かを見る」と「何かを何かとして見る」というふたつの表現の違いに注目し、自明なものが自明ではなくなるという変化がどのようにして起こるのかを捉えているからである。ヴィトゲンシュタインの関連する所見から、作品が特定のアスペクトへの気づきを促し、そのことがその作品の存在を異様なものにするということを示したい。

■第4発表

題目:作品の「大地」とは何か

発表者:斧谷彌守一(よきたに・やすいち/甲南大学名誉教授)

報告概要:

ガーダマーは、ハイデガー『芸術作品の根源』において、「世界」概念に「大地」(Erde)概念が対置されたことを驚嘆すべきことと述べている。『根源』において「大地は、建てつつ担うもの、養いつつ実らせるものであり、水や岩石、植物や動物を育む」とされている。この場合の「大地」は包括的な「地球」概念に近いし、あるいは、「地・水・火・風」という四大元素中の「地」を想起させる。だが、『根源』では、「大地は、[...]自らの法則に匿われ絶えず自らを閉ざすものとして、自らを示す」いう自己矛盾を内包している。「自らを閉ざしつつ、自らを示す」大地、「匿われつつ、聳える」大地とは何なのか。「作品が大地を大地たらしめる」とされ、この「大地」には、実は「作品」が関与している。

Adalbert Stifter, „Bergkristall“ (初稿1845→決定稿1853)では、クリスマスの前日、KonradとSannaが祖母のいる隣村へ出かける。雪が降り始め、一面の「白い闇」になる。妹が兄に答える「Ja, Konrad.」は初稿の4回から決定稿の17回へと拡大される。この拡大は単なる冗長性ではない。筋の運びは変わらない。意味によって筋を運ぶ言葉とは違う言葉の層[地層]が成立しているのではないか(そこでは、「Die Sprache spricht.」が生起している)。作品が岩石、金属、色、音、言葉の形で表現されるとき、それらの素材は単なる表現媒体ではなく、素材そのものが「自らを閉ざしつつ、自らを示す」「大地」「地層」を成しているのではないか。

[本部からのお知らせ]

◎ 総会・次回研究発表会について

第73回総会、第240回研究発表会(一般研究発表)は、2023年4月8日(土)に大阪大学で開催を予定しています。発表を希望される方は、以下の要領にてお申し込みください。

・申込事項:発表題目、発表要旨(400字程度)、発表者の所属等、使用機器の有無を記入したものを添付してメールで申し込む。

・申込先:件名を「個人研究発表申込」としてEメール(hanshin@jgg.jp)で申し込む。(※Eメールをご使用でない方は、「個人研究発表申込」と朱書きして学会事務局まで郵送。)

・申込締切:2023年1月27日(金)必着

◎ 名簿の改訂のおしらせ

2023年4月8日の阪神ドイツ文学会の総会開催にあわせて、会員名簿を改訂します。ご住所、ご所属、電話番号、メールアドレスに変更がございましたら、下記の回答フォームから、変更情報のご回答をお願いします。

変更情報は、Googleフォームをつかって集計します。回答のために、Googleにログイン(またはアカウントの作成)の必要はございません。回答後、ページ下部の送信ボタンをクリックしてください。なおインターネットをご利用されていない場合は、事務局まで変更情報をお知らせください(12月15日締切)。

回答フォーム <https://bit.ly/2022meibo>

◎ 新規会員のおしらせ

武井佑介(立命館大学)

西出佳詩子(大阪大学)

信國萌(大阪公立大学)